

資料

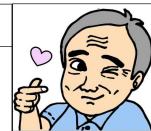
date : 年 月 日

学習内容： 暦と季節

学籍番号

旧暦って何さ？ 閏月？ 中秋の名月？

氏名



季節と二十四節気

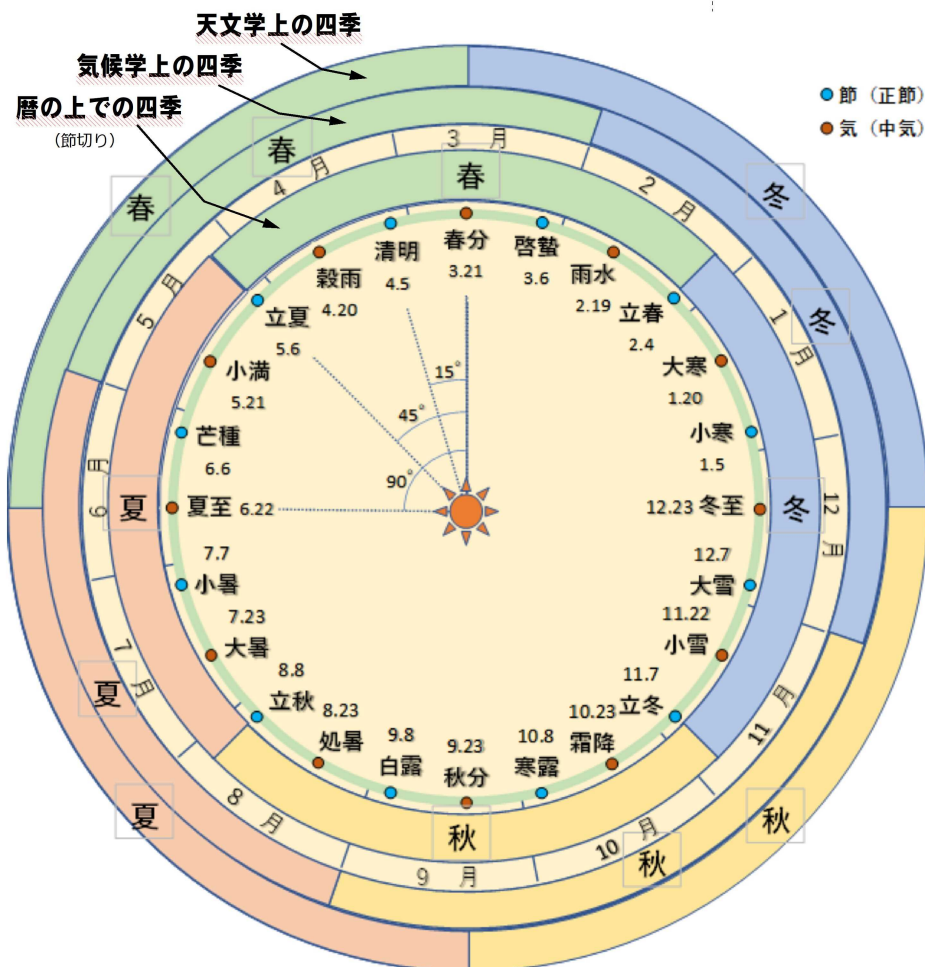
—— 暦の話 ——

我々が日常用いている暦は、グレゴリオ暦。すなわち太陽暦です。この暦を新暦と呼ぶこともあります。

しかし、わが国においては明治5年（1872）までは、太陰太陽暦、すなわち旧暦を用いていました。

「太陰太陽暦って何さ？」って思いますよね。ざっくりと説明しておきましょう。太陰と対称にあるのが太陽です。つまり、太陰とは「お月様」と思って下さい。暦の中には、「月」の運行のみで暦を決める純粋な陰暦（イスラム暦）などもあるのですが、月の運行に二十四節気といった太陽の運行を加味したものが太陰太陽暦なのです。つまり、季節との関係も考慮したうえで、お月様の朔望周期に則って月を定めていたのです。これが一般的にいわれる旧暦です。

まずは、陽暦にあたる「季節」と「二十四節気」について確認しましょう。



四季（季節の区分について）

春夏秋冬という四つの季節に区分したものであるが、その区分の方法には、次のようなものがある。

- ①天文学上の四季、②気候学上の四季、③暦の上での四季

※③暦の上での四季は古典等を学ぶ際にも参考となるので理解しよう。

	春	夏	秋	冬
天文学上の四季	春分～夏至前日 3月21日～6月21日頃	夏至～秋分前日 6月22日～9月22日頃	秋分～冬至前日 9月23日～12月21日頃	冬至～春分前日 12月22日～3月20日頃
気候学上の四季	3月～5月	6月～8月	9月～11月	12月～2月
現代の我々の一般的な季節の切り方				
暦の上での四季	節切り 立春～立夏前日 2月4日～5月5日頃	立夏～立秋前日 5月6日～8月7日頃	立秋～立冬前日 8月8日～11月6日頃	立冬～立春前日 11月7日～2月3日頃
	月切り (旧暦) 1月～3月	(旧暦) 4月～6月	(旧暦) 7月～9月	(旧暦) 10月～12月

二十四節気

12の節（正節）と12の気（中気）が交互にあり、合わせて24の節気となる。

二十四節気	新暦のいつごろか	黄経	節気種類	旧暦月決め	節切季	月名花	花札月の花
立春	2月4日頃	315°	正節	(1月)	春	睦月	松
雨水	2月19日頃	330°	中気	1月		如月	梅
啓蟄	3月6日頃	345°	正節	(2月)		弥生	桜
春分	3月21日頃	0°	中気	2月		卯月	藤
清明	4月5日頃	15°	正節	(3月)		皷月	高
穀雨	4月20日頃	30°	中気	3月	夏	水月	牡丹
立夏	5月6日頃	45°	正節	(4月)		卯月	菖蒲
小満	5月21日頃	60°	中気	4月		芒月	高
芒種	6月6日頃	75°	正節	(5月)		水月	牡丹
夏至	6月22日頃	90°	中気	5月		水月	牡丹
小暑	7月7日頃	105°	正節	(6月)	秋	文月	萩
大暑	7月23日頃	120°	中気	6月		葉月	薄
立秋	8月8日頃	135°	正節	(7月)		長月	菊
処暑	8月23日頃	150°	中気	7月		神無月	楓
白露	9月8日頃	165°	正節	(8月)		霜月	柳
秋分	9月23日頃	180°	中気	8月	冬	師走	桐
寒露	10月8日頃	195°	正節	(9月)			
霜降	10月23日頃	210°	中気	9月			
立冬	11月7日頃	225°	正節	(10月)			
小雪	11月22日頃	240°	中気	10月			
大雪	12月7日頃	255°	正節	(11月)			
冬至	12月22日頃	270°	中気	11月			
小寒	1月5日頃	285°	正節	(12月)			
大寒	1月20日頃	300°	中気	12月			

太陽を基準として暦をとる（月日を決める）のが太陽暦で、月を基準として暦をとるのが太陰暦だとわかりましたね。余談ですが、イスラム系の国の国旗に使われている図案といえば、☾（三日月）です。ここから月というものに重きをおいていたことが、わかるでしょう。一般的な太陰暦では、新月（朔）が月の始まりとなるのですが、イスラム圏の場合は三日月の日が月のはじめとなる一日（ついたち）にしていたそうです。ともあれ、月を基準とする陰暦をつかっているところもあったのです。わが国も太陰太陽暦を明治に入るまで使っていたのですから。

続いて月のお話です。

月（お月様）

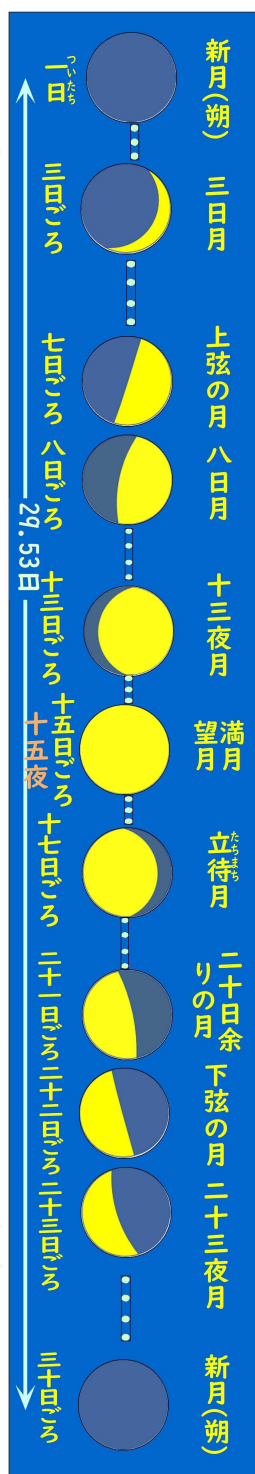
月の満ちかけの周期を朔望周期といひ約29.53日です。地球から見て月の方位が太陽と重なり見えない月が新月です。当然ですが、日食がおこるのもこの新月の時です。新月の時、つまり月と太陽とが同じ方位になった地点を朔といひ、月のはじまりである一日があてられます。徐々に膨らみ、だいたい15日後に満月となります。この満月の状態を望または望月といひます。

月（月の始まりとひと月）

そろそろ気付いてきたでしょう。旧暦では月の満ちかけ（朔望）で、暦をとっていたのです。「月（何月）」の始まりは「朔」を迎えた時で、次の「月」は、また「朔」を迎えた時となるわけです。そして、ひと月の長さ（日数）は29日か30日となるわけです。現在のように31日ある月はなかったわけです。

では、この朔を迎えた月は何月かをどうやって決めていたのでしょうか。ここで先ほどふれた「二十四節気」が登場します。「節」は季節を分けるもの、「気」は月の名前を決めるものと言われ、何月であるかは、「気」によるということになります。

朔望周期（ひと月）の中に存在する「気（中気）」が何月であるかを決めるのです。朔を迎えたある月が次の朔を迎える間に存在する中気が「雨水」だった場合、その月は「一月」となります。「春分」の場合には「二月」、「穀雨」の時は「三月」です。



閏月（閏年ならぬ閏月？）

1年間365日の中に二十四節気の中気は12回あるわけですから、 $365 \div 12 \approx 30.4$ 。30.4日に1回中気が存在することになります。月の満ちかけの朔望周期は約29.5日。ということは、ひと月（1朔望月）の中に中気が存在しないことがあるわけですね。旧暦では、月の名前を決める中気が存在しない月を閏月としたのです。一つ前の中気「夏至」が存在した「五月」のあとの、中気が存在しない月の場合「閏五月」としたのです。この閏月は19年のあいだに7回（3年弱に1回）加えることでほぼ誤差なく暦を運用できたということです。つまり、昔は1年が13ヶ月あった年もあったのです。

一年（約365.2422日）を12で割ると30.43685。月の朔望周期は約29.530589日。月の朔望を12回繰り返しても約354.3671日、1年365.2422日から見れば、11日ほど短くなってしまいますので、季節との兼ね合いを維持するために設けられたのでしょう。これが、太陰太陽暦（旧暦）といわれるものなのです。

【こぼれ話】

六曜というのを知っていますか。「先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口」という六つあるあれです。「結婚式は大安がよい」「葬式は友引を避ける」など縁起を担ぐことで現在でも用いられています。この六曜も旧暦と関わりがあります。どの日にどの六曜を割り当てるか法則があるのです。

先勝→友引→先負→仏滅→大安→赤口の順で割り当てられるのですが、月名（旧暦の何月であるか）によって、はじまる六曜がずれていきます。

旧暦の1月1日は「先勝」、1月2日は「友引」、1月3日は「先負」となります。朔を迎え月が変わり、2月になると、今度は2月1日は「友引」、2月2日は「先負」となります。右表のように割り当てられるのです。

月名（旧暦）	ついでに 一日の割当
1月・7月	先勝～
2月・8月	友引～
3月・9月	先負～
4月・10月	仏滅～
5月・11月	大安～
6月・12月	赤口～

カレンダーを見ると、旧暦の月日は記されてなくても、六曜は載っていることはありますよね。六曜の仕組みを知っていれば、今日が旧暦でいうと何月の何日かを導き出すことができます。まあ、何の役にもたたないでしょうが、古人が月を見て想い描いた情感と産み出した学問の熱を感じとっていただければ幸いです。

自然を感じ、季節を感じ、情緒を感じ、法則性を感じ、生活と密着しながら、なんとか整合性のあるものへと創り上げた暦のドラマ、そのロマンを我々も生活の中でときおり振り返って感じてみるべきなのでしょう。